

「下種の研究」其の三

——即身成仏論——

松 井 孝 純

- 一、高祖聖人と門祖聖人の成佛論
- 二、即身成佛の久遠と現代
- 三、即身成佛の三姿
- 四、小 結

ここ数年「下種の研究」について、種子の語意から、仏性論評、台当の種子論、門下の下種の法体を論じてきたが、今回は下種と成仏に関連して即身成仏論について論じたい。

抑々下種とは、我々の第八識の心田に仏種を植えつけることを意味しておる。即ち総名南無妙法蓮華經の仏種を何んらかの方法で我等の第八識の心田に下種することである。その下種の法体については「下種の研究」其の二で論述した。ところが下種の方法という形式が次に問題となる。その形式と成仏の形と被成仏者などの関係が、人によっては論議を呼び、異見となり、分派を醸し出すのである。幕末から明治時代にかけての当宗の皆久論争等も、その好例として衆目を集めたのである。いつか此の問題に就いてもふれなければならない。

一 高祖聖人と門祖聖人の成仏論

室町期の法華宗諸門流は成仏得道の法について大いに迷っていた。一部の門流では中古天台の本覚論の影響を受

け、自然法爾の無作仏身論を宗義としていた。高祖日蓮聖人の聖意を主張した門祖日隆聖人は、それらの門流を習い損じの諸法華宗と呼び、正しい成仏論を五百億塵点の久遠での釈尊の成仏の姿に見ようとされたのである。従って

当世の諸人成仏得道を現在の脱に約して之を成ず。此の辺は本迹俱に迹門の得道なり。高祖聖人の御本意は、本門の意は一切衆生の得道を最初下種に約して之を談ず。此の時は本迹俱に本門の意に約して真の即身成仏なり（私新抄、宗全第三卷二二二頁）

とも、また

本因妙も本果妙も俱に生仏一如の即身成仏なり。されば本門の久遠成道というのは、報仏色身の中には色の身体に於て久遠を談ずる故に、久遠成道と云ふは即身成仏なり（法華宗本門弘経抄第九卷三七七頁）

と云はれている。このように最初下種に約して之を論じようとされた門祖の発想は、極めて自然な理法であると思ふ。俗に道に迷うたら一番最初の振り出しに戻れという諺がある。門祖は素直にそれを実行されたようである。従って高祖の御遺文にもどり、久遠成道時の本仏釈尊の本因妙の姿を探がされたのである。

偕て成仏とは仏に成ることである。仏とは久遠実成主師親三徳円具の釈尊である。然し私共凡夫には久遠実成の釈尊と同じ仏に成ることは極めて至難であると教えられてきたのである。従って鎌倉新仏教の法然、親鸞、道元の各開祖達は、成仏をあきらめて往生を主張したり、坐禅をすすめたりした。厳しい難行、苦行の修行を経なくても、また長時間の修行を経なくても成仏できたり、仏の救済にあづかっていたりできる仏教を首唱しようとしたからである。然し鎌倉新仏教開祖の一人である日蓮聖人は彼等開祖とちがった意味で易信、易行の末法相應の成仏道を強く主張したのである。それは難行苦行の修行を積功累徳し、不浄な凡夫身をはなれたくとも、最勝王経である法華経によって、凡夫の肉身がそのまま仏身を得る即身成仏論を平易な論述によって展開したのである。即ち日蓮聖人は

法華經と申すは一切衆生を仏になす秘術まします御經なり。所謂地獄の一人餓鬼の一人乃至九界の一人仏になせば、一切衆生皆仏になるべき理わり顯る①（法蓮抄）

法華經に云く若有聞法者無一不成仏……されば此の經文をよみて見候へば、此の經を聞く人は、一もかけず仏になる文なり。（阿仏房御書）

法華經と申すは手に取れば其の手やがて仏になり、口に唱ふれば其の口即ち仏なり②（上野尼御前御返事）

法華經を耳にふれぬれば是を種として必ず仏になるなり。（法華初心成仏抄）③

正直に方便を捨て但だ法華經を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人は、煩惱業苦の三道、法身般若解脱の三徳と轉じ、三觀三諦即一心に顯れ、其の人所住の処は常寂光土なり④（当鉢義抄）

蓮華と申す花は菓と花と同時なり、一切經の功德は先に善根を作して後に仏になると説く、かかる故に不定なり、法華經と申すは手に取れば其の手やがて仏になり、口に唱ふれば其の口即ち仏なり⑤（上野尼御前御返事）

誠に理解しやすいこれらの高祖聖人の御遺文が示すように、法華經を中心とした因果同時の法華經の經力そのものの功德力による成仏の主張であり、即ち我々凡夫が口に手に耳にと凡夫身そのままの因果同時の即身成仏論を展開されたものである。また高祖聖人が報恩抄で眞実の成仏は華は根にかへり、眞味は土にとどまると判じられた如く、仏果の成仏は仏因を下種するところへ還えつて論じなければならぬと仰せられているのである。即ち釈尊の久遠成道の本地の成仏へ還つてこそ眞実の成仏を顯はすことができる論じておられるのである。

この様に高祖聖人が首唱したところの総名妙法蓮華經を耳で聞けば良い、口で唱えれば良い、手にふれば良いという簡単な易行道の成仏論に徹することのできなかつた日蓮聖人門下の人々は、聖人滅後、まもなく彼等が学んだ天台本覚論との妥協によって、理づりの無作本覚思想を成仏論に導入したのである。ところが絶対妙から相對妙へを教

条とする門祖日隆聖人は、中古天台教学に毒された門下の成仏論に対し、正統成仏論を打ち出したのである。即ち……
当世の諸人成仏得道を現在の脱に約して之を成ず。此の辺は本迹俱に迹門の得道なり……高祖聖人の御本意は……
(私新抄)

と申されて当時の成仏論に挑戦し、高祖の御本意に戻ることを求めて、当時の門下の成仏論を本迹俱に迹門の得道であると教示されたのである。然も門祖は最初下種の久遠へ還つた即身成仏論をもつて高祖の本意であると断じておられるのであるから、当時の門下の成仏論の間違いを指摘し、訂正を求められた門祖の並々ならぬ決意が伺われるのである。

二 即身成仏の久遠と現代

法華経以外の諸経諸論にも色々な形で成仏論が種々述べられているが、それらの成仏のほとんどが歴劫修行という長時間の成仏論である。然も下種論があつてもその種子の法体は法種であつて乗種ではない。中には性種である仏性があるとか無いとかを争点とするものさえある。此の様な状態であるから法華経以外の諸経諸論の成仏をたずねても真実の即身成仏がない。偶々即身成仏があつたとしても

先づ迹門には二乗成仏を以て、今日一代衆生の得道を顕す。其の故は前四味の間は衆生成仏の種子を隠す。故に其の経経を聞いて種子として成仏すと明す。故に其の経の成仏なり。今経迹門に至り化道の始終を顕し、大通の元始を示し大通下種を以て之を論ずれば、華嚴般若等の衆生の得道は迹門の成仏となるなり。然る間、爾前の即身成仏は真実に非ず。(私新抄)

と申されているように爾前諸経の成仏は真実の即身成仏ではないのである。然も即身成仏という其の身の六識陰妄の凡夫身の即身成仏論ではない。したがつて末法の現代には無価値な成仏論である。この事を門祖が指摘して

但妄の凡夫の肉身に即して成仏すること即身成仏にては有れ、過去の宿善を積んで肉身の迷を転じて、善身のハダへと成つて成仏する故に即身成仏に非ず。熟脱の上に論ずる所の成仏なるべし（私新抄）⁽⁸⁾

と云っている。此のことは門祖の成仏論についての革命的な論述の始まりである。したがって但妄の凡夫の凡身のままでの即身成仏論の展開は、当時の仏教界に大きな衝撃を与えた筈である。門祖以後の仏教界では、門祖の本迹論や付嘱論、本因本果種子論、本尊論、繰り返えし五百塵点劫論への批判はあつても、成仏論についての論述が少なく、独り当宗の先師の即身成仏論が教界を風靡していることによつてもわかるのである。

偕て門祖の即身成仏論の特色は、五百塵点劫の久遠本地に於ける釈尊の成仏と、所化の一切衆生の成仏との関係を明らかにされたことである。しからば久遠本地に還えつての成仏を仏と衆生との関係で捉えた即身成仏論の源点はどこにあるのだろうか、

久遠の昔一切衆生の成仏の始は釈尊にて御座す故に、是れ真実の凡夫の即身成仏なり。寿量品に云く、我れ本と菩薩道を行じて成ぜし所の寿命、今猶ほ未だ尽きずと云へり、云ふ所の菩薩とは、釈尊久遠の昔、名字即の凡夫として本因妙の修行を成じ即身成仏し給へり、是れ三世十方諸仏菩薩の成等正覚の根本なり（私新抄）⁽⁹⁾

とある如く、寿量品の我本行菩薩道所成寿命今猶未だ復倍上数の本因妙の依文がそうであろうかと思ふのである。また甚大久遠寿命無量阿僧祇却常住不滅という本果妙の仏寿たる寿命を、常修常行の菩薩道の本因妙の寿命の中に収めて、この本因本果を総在した妙法蓮華経を久遠の釈尊が「我れ本菩薩の道を行じ」る時に、信心口唱し、南無妙法蓮華経と唱え、信じる事行の中に、本果の仏と本因の菩薩とが、即ち第十界の仏と第九界の菩薩とが同一姿勢で存在しているのである。そこに即身成仏の源点があるのではないだろうかと思ふのである。また高祖聖人が

仏既に過去にも滅せず、未来にも生ぜず、所化以て同躰なり（本尊抄）⁽¹⁰⁾

と仰せられたのも此の有様を云われたものであらうと思われるのである。即ち久遠本地に於ける釈尊が凡身のまま南無妙法蓮華經と信じ唱えて即身成仏なされ、それを見て聞いた衆生も凡夫の肉身のままて釈尊と同じように即身成仏した。此の事を所化以て同躰なりと教示になっているのであらう。門祖の成仏論の源点もそこにあると思ふのである。その源点を「成仏は成仏した仏を手本として、その如くし、その如くなる」という極めて簡単な公式の上になりたてたものであらうと思ふのである。即ち成佛の形が問題の鍵を握っているのである。そのことを

道仰せに云く、即身成仏の法門は先づ成仏の形を定むべきなり。仏に於て権実本迹あり、故に即身成仏に復た権実あるべし(私新抄)^⑪

と申され、門祖の即身成仏論は久遠本地の釈尊最初成道の時の即身成仏の方法と姿を、現在の本地本門法華經による我々但妄の凡夫の即身成仏の方法と姿で、終始して成仏の形で決定されるべきであると論述されているのである。

仏、それは丈六の仏などとお化けの様に虚構された釈尊、カスミを食う仙人以上に人間ばなれした釈尊、仏と人と距離を十萬億土の遙かな彼方へ押し出されてしまった釈尊、想像を絶する清淨無垢而も豪華華麗な浄土にいて、汚濁充滿而も穢土不浄な凡身の近寄り難い世界に住む釈尊、然も八十種好という福徳円満慈悲曠大の顔貌を持った釈尊、まったく天地雲泥の差の前にあきらめ切っていた我々に、即身成仏という光明を投げかけたのが法華經であり、高祖聖人であり、門祖である。即ち即身成仏が現代から久遠に還って、現代に戻って来たのである。

いかにも今度信心をいたして法華經の行者にてとほり日蓮が一門となりとおし給うべし。日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たることあに疑んや(諸法実相抄)^⑫

という高祖聖人の自信ある現代への言葉は、仏教の基本的な命題としての成仏論の把握がもたらした確信である。此の確信は更に

今日蓮は去る建長五年四月廿八日より、今年弘安三年十二月に至るまで二十八年が間、又他事なし。只妙法蓮華經の七字五字を日本国の一切衆生の口に入れんとはげむ計りなり。此れ即ち母の赤子の口に入れんとはげむ慈悲なり⁽¹³⁾（諫曉八幡抄）

という積極的な即身成仏への行動となつて鎌倉の人々の中には入つていたのであろうと思う。門祖は、この高祖聖人の遺鉢を受け、中古天台教学の天真独朗の成仏論に耽溺しきつた教界へ

久遠成道を以て即身成仏を顕さば、久遠の昔一切衆生の成仏の始めは積尊にて御座す故に、是れ真実の凡夫の即身成仏の始めなり⁽¹⁴⁾（私新抄）

と現代の即身成仏論に、過去久遠の即身成仏を実証として挙げるところの革命的な新風を送り込んだのである。

三 即身成仏の三姿

以上の如く現代の即身成仏に過去久遠の即身成仏を挙げて、真実の即身成仏を説明された門祖は、更に即身成仏には聞法下種即身成仏、唱題下種即身成仏、信行下種即身成仏の三姿があることを論じておられる。

即ち高祖の阿仏房御書の「若有聞法者無一不成仏……此の経を聞く人は一もかけで仏になると申す文なり」等の御遺文より展開された聞法下種即身成仏の一姿は、門祖によつて、

下種は聞法受持して口に移し誦誦して下種を成ず⁽¹⁵⁾（弘経抄）

過去三五下種と滅後の末法とは「聞法為種」の下機の時機なる故に口業を以て正と為し、而も三業を用ふ⁽¹⁶⁾（弘経抄）
下種と云ふ辺は「或從知識或從経卷」して「聞法為種」する間、仏種を下すと云ふは聞法なる故……「下種は権乘に亘らず」と云は此の意なり（弘経抄）⁽¹⁷⁾

既に一句一偈を聞くと云ふ間は名字なり。名字と云ふは妙法の名を聞くと云ふことなり。故に信は又聞に依つて必ず起るなり(弘経抄)¹⁸⁾

理即の位より名字即に至つて本地の妙法蓮華経を初て之を聞く時、首題経王の功力に依て無始の無明を断せり(私新抄)¹⁹⁾

等と云はれて「聞法為種」下種即身成仏を明らかにされている。これは五百億塵点の久遠本因妙の時も末法現代の時も、仏道修行の始点は常に聞法で、その法は本因妙の釈尊が成仏を現じるため必要な総名妙法蓮華経であると仰せられていのである。即ち聞かし、聞かされることが聞法下種であると云つていのである。なぜならば聞かす仏界と聞かされる九界とが互具し生仏が一如する本因本果の事具一念三千の妙法を総在する能生総在の総名妙法蓮華経を、凡夫の貧体の凡身に聞き聞かされて心に仏種を植えるからであるとの御指南である。

次に唱題下種即身成仏の一姿であるが、これは高祖が上野尼御前御返事で「法華と申すは手に取れば其の手やがて仏になり、口に唱ふれば其の口即ち仏なり」等の御遺文より展開された唱題成仏論である。それが、門祖によつて名字即に住して題目を口唱せしむ、此の題目を以て下種と為して、此の本尊の聖衆は得道したまへるなりと云ふことを、本門に至つて顕本するなり。故に本門の本尊本門の戒壇本門の題目と云へるは一切の仏菩薩等の下種の法鉢は題目に限ると云ふことを顕して、未法当時の本未有善の機の下種を成ぜんが為なり(弘経抄)²⁰⁾

名字即の位に住して口に唱へ奉りて仏の種子を心田に収めたり。此の口唱下種の首題に依つて三惑五住の惑者をば得脱すと云へり(私新抄)²¹⁾

首題を一反唱へたまふ時、一切衆生の心性の三因仏性の南無妙法蓮華経と一鉢に会して隔別無し(私新抄)²²⁾

我等悪人たりと云へども一反口唱の首題の功德に依つて、釈尊所具の凡夫と顕れ、能具所具一鉢なれば釈尊多宝上

行等の諸菩薩総じて十界の本尊の聖衆行者所具の全体に非ずや、是れ即ち名字即の即身成仏なり(私新抄)②

本門の願本とは仏菩薩の凡地名字即の口唱の南無妙法蓮華經を顕はして末代の本尊是れなりと定めんが為なり。三十十方の諸仏菩薩も因位の時は口唱の題目なるべし此の時は本地の釈尊上行菩薩三十十方身の諸仏十界の聖衆、皆悉く口唱の南無妙法蓮華經なり。されば今日靈山会場の仏菩薩人天等、本を顕せば名字凡人に還つて下種の妙法蓮華經を唱へたまへり(私新抄)②

等と云はれておられる。これは久遠本地の釈尊上行三世十方の諸仏等の名字凡人の因行は題目の口唱であるから、この題目の口唱によって釈尊は即身成仏を現じられたのである。したがって観心本尊抄の結文の「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此の五字を受持すれば」の通り、題目の受持唱題は、釈尊の本因妙の受持唱題と同じく名字の唱題下種即身成仏の姿を現するのであると御指南なさつておられるのである。

次に信行下種即身成仏の一姿は、高祖が観心本尊抄の結文で述べられた五字受持の身口意三業総持の信行より展開されたものである。即ち門祖は、本仏釈尊が信行口唱成仏した仏因仏果の功徳を総名妙法蓮華經として末代幼稚の我々に既に与えられているのであると論じ

広略の義味照了を捨てて元意の本地総持の妙法蓮華經を取つて、法躰に義味を立てず、「行浅功深以顕経力」等と信じ奉つて経力を憑めば、信力経力には功徳廣大なり。解行の義味を立つれば中々機情の私物となつて、機情に下つて経力薄くなる故に、行者の思慮を立てず無分別にして、但仰ひで信を取つて心を一にして、行住坐臥に受持口唱して淨心に信敬すれば、必ず信力不退の位に至る(弘経抄)②

即身成仏に於て六即の不同これあるべし、其の中に名字の即身成仏を以て当宗の所詮と為す。六即の法躰は名字即到極成せり。是れ則ち本門の直機なり。……是れ信位の即身成仏にして本門直行の成仏なり。爾前迹門の意は解行

証に於て即身成仏を論ず。本門の意は信心の位を以て即身成仏を論ず「信は是れ道の元、功德の母」とは三世諸仏の功德聚の所なり（弘経抄）²⁶

我等悪人たりと云へども一念の信を以て妙法蓮華経を心田に収めたり、作仏疑ふ可らず（私新抄）²⁷

未法当時の我等三毒強盛の悪人、是字非字を弁へず思慮分別も之れ無くして解義覚知を備へず、一念信心計りにて南無妙法蓮華経と口唱する……是れ即ち本門の即身成仏なるべし（私新抄）²⁸

末代下種の種子とは信心是れなり、此の信心とは諸行の中には最勝なり。六即の中には名字即の下種の処に之れあり（弘経抄）²⁹

等と云はれ、総名下種信行即身成仏の姿を述べられて信行の重要性を力説されているのである。従つて此の即身成仏の信行觀をば

末代初心の行者は南無妙法蓮華経と聞ひて、疑はず信敬して義味を思慮せざる分の信行觀は是れ宗旨なり（弘経抄）³⁰
と御指南されて、久遠五百億塵点の本因妙の元始に下種した下種も信行下種であり、三世十方分身の諸仏十界の聖衆も名字即の信心、即ち総名南無妙法蓮華経を唱え信じ、信じ唱える信心下種即身成仏の姿であつたことを明らかにしておられるのである。

以上の如く聞、唱、信の各々に総名妙法蓮華経の名字即身成仏のあることが、門祖によつて本地本門法華経の立場から明らかにされたのである。この三姿は日蓮門下としては誠に重要な成佛論の要諦を述べられたものであつて、日蓮聖人の末法での成佛の真髓が開顯されたものである。

四小 結

本論では、高祖日蓮聖人の御遺文を依処として、それを展開された日隆聖人の御聖教を多数列举し、当宗が主張する即身成佛論の特色を述べることを目的とした。思うに日蓮門下各派の学僧に依って述べられている成佛論は、その多くが三益論による未来成佛に主張を置いたものが多いのである。ただ当宗の忍定日蓮上人以後、本隆寺日真門流の唯妙日東、遠成日寿師などに下種即成論が認められる。然し、その中に過去久遠へ還えつての即身成佛論は無い。独り日隆聖人のみ過去久遠本地の本因妙の积尊が、即身成佛された時点で還えり、それを末法の現在の我々凡夫の名字下種即成へ移し、聞、唱、信という事行の中で即身成佛をあきらかにされたのであるから、これは日蓮門下の中でも最も特色ある成佛論であり、日隆聖人の發揮された末法凡夫の成佛への不滅の法燈であると思うのである。

- ① 日蓮聖人御遺文縮冊 一一五六頁
- ② " " 二〇七六頁
- ③ " " 一六八四頁
- ④ " " 九九一頁
- ⑤ " " 二〇七五頁
- ⑥ 日蓮宗学全書第三卷 二三一頁
- ⑦ " " "
- ⑧ " " "
- ⑨ " " 二三三二頁
- ⑩ 日蓮聖人御遺文縮冊 九三九頁
- ⑪ 日蓮宗学全書第三卷 二三三三頁

「下種の研究」その三

「下種の研究」その三

- | | | |
|---|---------------------|---------|
| ⑫ | 〃 | 九六一頁 |
| ⑬ | 〃 | 二〇三八頁 |
| ⑭ | 〃 | 二三一頁 |
| ⑮ | 法華宗本門弘經抄第十卷六三二頁 | |
| ⑯ | 〃 | 第五卷四四二頁 |
| ⑰ | 〃 | 第八卷四三二頁 |
| ⑱ | 〃 | 第十卷一五五頁 |
| ⑲ | 〃 | 第三卷二五七頁 |
| ⑳ | 〃 | 第十一卷 七頁 |
| ㉑ | 日蓮宗字全書 | 第三卷一二九頁 |
| ㉒ | 〃 | 一三〇頁 |
| ㉓ | 〃 | 一三五頁 |
| ㉔ | 〃 | 一二八頁 |
| ㉕ | 法華宗本門弘經抄第十卷五六八―五七二頁 | |
| ㉖ | 〃 | 第十一卷九八頁 |
| ㉗ | 日蓮宗字全書 | 第三卷七九頁 |
| ㉘ | 〃 | 二八九頁 |
| ㉙ | 法華宗本門弘經抄第一卷六九一頁 | |
| ㉚ | 〃 | 第十卷五七二頁 |